

翻 訳

李 徳周「初期韓国教会の民族教會的性格」【一】(1/3)

(原題, 이 덕주 “초기 한국교회의 민족교회적 성격”)

訳者 常 石 希 望

《解題》

ソウル東南近郊, 地下鉄「スソ(水西) 駅」近隣に「韓国キリスト教歴史研究所」という研究所が存し, ここには「韓国キリスト教歴史学会」も併設される。間口は狭く敷地も広くはないが, この研究所および学会は, 国民の4人に一人がキリスト者であると言われる韓国キリスト教の学的水準を先導する機関の一つである。「研究所」では韓国キリスト教史に関するきわめて優れた多数の資料や著作が出版され韓国キリスト教界および韓国歴史学界に多大の影響を与え, 他方「学会」では韓国教育部(文部科学省) 機関から最上ランク評価を受ける学会誌『韓国キリスト教と歴史』が発刊されており, まさしく韓国キリスト教界の学的水準先導機関と呼ぶにふさわしい。

本稿の著者, 李 徳周教授はこの研究所・学会に深く関わってこられた方であり, ここに翻訳した論文「初期韓国キリスト教会の民族教會的性格」も, 同研究所で出版された著書〈李 徳周『初期韓国キリスト教史研究』1995) 所収の一論文である。また訳者が本論の翻訳に至ったのも同研究所を介してであり, この場を借りて感謝の意を伝えたい。特に, 同研究所室長を勤められる金 承台教授には, 翻訳上の難解な固有名詞(地名, 人名, 専門術語), あるいは100年以上も前の韓国語資料読解の難しさなどに関し懇切丁寧な指導を得たことも, あわせて感謝の意を表したい。

李 徳周(이 덕주, イ トクジュ) 教授は, 韓国監理教神学大学・大学院で韓国キリスト教史を担当される生粋の韓国キリスト教史の専門家であり, 特に「草創期」あるいは「初期」を中心的に研究しておられる。忠清北道・忠州出身, 最終学歴はソウル大学大学院, 哲学科, 宗教学専攻修了, 神学博士。1985年からは監理教会の牧会も担当しておられるという。著書の数は多く, 大事典編著や翻訳書や各個教会史数冊を除いても, (訳者が把握しているだ

けで) 13～4冊にのぼり、いずれもが初期韓国キリスト教史関係の著書である。

上述したようにここに翻訳した論文は上記著書所収の一論文であるが、同著書は李 徳周教授が過去10余年に亘ってコツコツと書き続けてこられた「初期韓国キリスト教史関連の論文(17本の論文)」を一冊の著書にまとめられた論文集である。研究者の多くが一番やりたいと願っていても、なかなか出来ない地道でかつ最も質の高い仕事だ。その意味でも本書は、これまでの先生の著書の中でも最も代表的な業績だと言えよう。なお日本語に訳されている同教授の論文には「三・一運動と提岩里教会事件」(韓国キリスト教歴史研究所編、信長正義 訳『三・一独立運動と提岩里教会事件』神戸学生青年センター出版、'98、所収)があるので参照されたい。

この翻訳は紙面の制約のため、3回【一、二、三】に分けて掲載しなければならない。そのため内容の全体をある程度見通せるように、本論の「目次」を以下に記しておきたい。

【目次】「初期韓国教会の民族教会的性格」

I, 緒論

II, 民衆階級の入信動機

II-1), 初期における教育および医療事業: 民衆との接触契機

II-2), 嬰兒騒動と平壤キリスト教徒迫害事件: 民衆の挑戦と試み

II-3), 民衆の保護所となった教会

——— (以上【一】, 今回掲載分。以下は【二、三】とし、次回以降掲載予定)

III, 知識人たちの集団改宗

III-1), 開化派知識人たちの社会改革への試み

III-2), 独立協会運動: 民衆民主主義と体制改革運動

III-3), 独立協会事件後の知識人階層の入信

IV, 日帝(日本帝国)の侵略とキリスト教徒による民族運動

IV-1), 初期, 非暴力抵抗運動

IV-2), 後期, 武力抵抗運動

V, 復興(リバイバル)運動と教会の非政治化

V-1), 初期復興と民衆の宗教体験

V-2), キリスト教社会倫理の形成

V-3), 教会の非政治化作業

VI, まとめ

- 原著者による「原注」はそのままアラビア数字で, ¹, ², のごとく示した。
- 訳者による「訳者注解」には, [] 記号を付して本文中ほかに記述した。

- 別途訳者による「訳者注」を設け^[1]、^[2]、のごとく示し、巻末に記述した。これは本文中に挿入するには長すぎて、本文の文意を理解しにくくさせると判断したためである。

「訳者注解 []」および「訳者注^[1]^[2]」を用いざるを得なかったのは、本論の元々の読者である韓国人にとっては常識的である事項でも、私たち日本人には未知の用語および理解困難な概念（特に、地名、人名、職名、歴史背景の差など）が多かったことによる。しかし原文の流れを損なうことを恐れ、出来るだけ控えたつもりである。

《本論》【1】、緒論

韓末^[1]、黄海道地域において活動した米国北長老会宣教師シャープ [Charles Edwin Sharp: 韓国名, 史 佑業] は、韓国人のキリスト教入信の動機を三つに分けて整理したことがある¹。シャープの分析対象は黄海道地域のキリスト教徒であったが、彼の分析は韓末に入信した韓国人すべてに拡大適用できるものであった。シャープは、まず第一に生命と財産を保護する手段としてキリスト教に入信するケースを挙げている。

「キリスト教に入ってくる多くの人々にとって、入信の第一動機は保護および権力への欲求である。時代の不安定さのゆえ、民衆は互いに助け合うための結成団体を作った。数知れないほどの多くの団体が結成されたが、それらの団体の目的は政治的なものである。例えばテタン [苔灘・태탄: 現北朝鮮黄海南道苔灘郡] で起きた次の例をみれば、昨今のキリスト教への関心の奥にひそむ動機がどんなものであるのかを知ることができる。一群の人々がその村 [テタン] に住んでいる一人の有力な人士を探し訪ねたのだが、彼は教籍を抜かれ教会から放逐された人物であった。人々は彼を訪ね、次のように言った。“実に多くの団体ができました。一進会 [1904年8月に結成された親日御用団体] もあり、あれやこれやの団体がありますが、私たちもどれかの団体に入るのが有利なように思えます。あなたは教育も受けた方であり私たちより学識も豊かなので、どの団体に入るのがよいのかを教えてください” と。つまり、この人たちはただ団体が持つ保護を与える力に期待しているにすぎなかった。これに対して彼らが聞いた答えは、“たしかに多くの団体があるにはあるが、加入に値する団体はただ一つだけであり、それは他ならぬ教会だ” というものであった²。

力なき民衆³は自分たちの生命と財産の保護を得ようとする「政治・経済的」欲求から、教会を選択する場合が多かった。特に、専制封建主義という社会秩序が崩壊しかかっている

る時に立ち現れてきた両班・官僚層による「民への」あくどき貧虐と不正、また外国の侵略に起因する社会・政治的不安という状況の下、民衆は自己保護の手段として教会を選んだのである。従って初期キリスト教共同体「教会」を構成した第一勢力は、このような民衆階層であった。ところでこれとは別の目的でキリスト教を選択した第二の勢力があり、シャープは彼らを「文明的欲求」を持つ人々として区分した。

「人々は20世紀の圧迫のさなかで、自分たちの先祖が守ってきた過去の文明が失敗するしかないことを悟るようになった。彼らは、キリスト教化された国々がこんにち最高の文明と文化を享受していることを知るにおよび、自分たちも過去から脱け出し新しい事物を捜そうとしていた。しかしこのような人々は、キリスト教をかかす種類の文明の一としてしか理解できない。彼らはキリスト教それ自体と、キリスト教が作り出した結果とを見分けない。彼らが求めているのは学校と西洋の学問、西洋の文化である」⁴。

西洋文化および文明に対する欲求を持っている人々が教会の中に入って来た。彼らは先に見た「民衆階層」とは異なる分類に属した。彼らは民族の開化を目的とし、その方便としてキリスト教を選んだのである。そのため彼らには民族意識、歴史意識が見出され、キリスト教を通して民族の歴史と文化を作り直そうとする「政治的」目的も見出される。彼らは、封建的社会秩序とは異なる近代市民社会形成への強い意志を持っており、進歩的知識人階層に属した。

政治・経済的欲求からキリスト教を選択した民衆階層と知識人階層は、韓国キリスト教を形成する二つの勢力となった。シャープは以上の政治・経済的欲求の他に、宗教的側面からの入信動機があることを指摘した。

「しかし現在に至って、キリスト教に入ってくる第三の動機が浮上している。真正なる霊的渴望が現れていて、多くの人々のうちで神の霊が働いている。この点をよく示す一つの例がある。韓国人の観点から見れば相当水準の学識を有している一人の人がいたが、彼は数年前から学習者〔求道者の意：韓国では教派にもよるが、受洗するためキリスト教を体系的に学ぶ求道者を教会では学習人・학습인・ハクスピンと呼ぶ〕になったにもかかわらず、教会の仕事あるいは霊的面においてはキリスト教に対してことさらに関心を示しはしなかった。彼は数年間学習者の状態にとどまったままで、本当のキリスト者ではなかったという。しかしこの冬彼は重大な変化を体験し、それからはあらゆることが変わったように見えた。彼は以前にも聖書を勉強したことがあったが、今はまっ

たく新しい書物として感じられ、すべてがこれまでとは異なって見え、以前とは別人になった」⁵。

シャープが上の文を書いた[1906年]頃は、1903年の元山[원산, ウォンサン:北朝鮮江原道]リバイバル運動(復興運動)^[2]が起きたのち、そのリバイバル運動の火の手が1907年の平壤 大リバイバル運動へと点火される直前の時期であった。これらの初期リバイバルを通して韓国人は内的な宗教体験をすることとなり、その過程を通して「真のキリスト者(real Christian)」となったのである。シャープが例として挙げた人物は、先に言及した「文明開化を目的に」キリスト教を選択した知識人階層に属す人物だと思われる。利己的な目的追求のための一個の方便としてキリスト教を選択した知識人たちが、リバイバルを通してキリスト教の本質的信仰を体験することにより意識の変革を生じたというわけである。このような信仰体験と意識改革は「生命と財産の保護」を獲得するためキリスト教を選択した民衆にも起こった。民衆もまたリバイバルを通してキリスト教信仰の本質を体験し、キリスト教共同体の中で新しい存在意識を持つようになった。

このようにして初期韓国キリスト教信仰共同体の中には、対照的な二つの階層、すなわち民衆階層と知識人階層が共存することになった。キリスト教に接近し、キリスト教に入ってくるようになった動機は違っていたが、しかし彼らは等しくリバイバルを通してキリスト教の本質的信仰体験をなすことにより、共同の信仰および現実意識を持つに至った。こうした信仰体験を経て「キリスト教化(Christianized)」された民衆階層と知識人階層は、キリスト教的観点から社会状況に適用、あるいは抵抗するようになった。そして旧韓末の時代状況において、かかる抵抗運動が民族運動と呼ばれるようになり、韓国教会が民族教会としてその存在性を確保するにいたる端緒を開くようになった。

本稿はこうした観点に立ち、キリスト教(プロテスタント)宣教が本格化した1880年代中盤以降から、キリスト教が民族宗教として根付き得る可能性が確認された1910年代に至るまでの時期を探り、またその時期に現れた韓国キリスト教信仰共同体の性格と、社会現実参与運動としての民族運動の展開過程を探ることを目的とする。

このような関心をより詳しく説明するため、本稿が念頭に置いている三つの質問点を先ず明らかにしたい。

第一、初期韓国教会を形成した主体者の政治・社会的性格とはどのようなものであったのか。この点は初期キリスト教者の社会・経済的身分階層の構造を調べれば明らかとなることである。本稿ではすでに、初期韓国キリスト教共同体は民衆階層と知識人階層という二元構造を有していたことは明らかにした。

第二、初期韓国キリスト教徒たちは、旧韓末の社会・政治的状况(現実)をどのように理

解しており、またそれに対するどのような対応姿勢を有していたのか。このような社会現実に対する彼らの認識および対応という構造の下で、旧韓末のキリスト教徒たちの民族運動を理解しなければならないであろう。本稿は、教会の中の二つの階層が民族運動を通してどのように出会うようになったのかを、探ってみるつもりである。

第三、初期韓国キリスト教徒たちは社会現実に対する彼らの認識およびその対応としての民族運動を展開するのであるが、その場合キリスト教特有の信仰体験はどのような意味を有していたのであろうか。韓国キリスト者たちの民族運動が「キリスト教民族運動」と規定され、韓国教会が「民族教会」と規定されるためには、キリスト教に固有な独特の信仰体験（例えば、悔い改め、再生、清潔、聖化など）が個人および共同体の生[삶:生命]と連結していなければならない。これに関して本稿が明らかにしようとする点は、初期キリスト教徒たちの信仰体験が、彼らの社会現実認識および社会現実参加に対してどのような影響を与えたのか、という点である。

【II】、民衆階層の入信動機

II-(1) 初期における教育および医療宣教事業：民衆との接触契機

日本から訪韓した[アメリカ監理宣教教師] マックレイ (R. S. Maclay) を介して1884年6月高宗の宣教に関する允許[いんきょ:王による許可]が出されたが、それに従って初期宣教事業は病院と学校の事業に限定されることになった⁶[3]。宣教師たちも韓国政府との摩擦を避けるため医療宣教と教育宣教以外の宣教、すなわち直接的な福音宣教には慎重を期した。かくして1885年監理教では培材学堂(ペジェ ハクタン)を、1886年には長老教の孤兒院学堂(後の儼新・キョンシン・学堂)、監理教の梨花(イファ)学堂⁴をそれぞれ設立した⁷。1885年には国王の恩恵によって建てられた広恵院(クアンヘウォン:病院)以外にも、監理教スクレントンは純粋な民間病院である施病院(シピョンウォン)を貞洞(チョンドン⁵)に設立、1887年には監理教が女性専用病院・保救女館(ポグ ヨグァン)を貞洞に設立した。長老教でもアレン[Allen, Horace Newton: 宣教師, 医学博士, 駐韓米外交官, 最初に来韓した医療宣教師, 韓国名安連]が設立した済衆院(チェジュンウォン)を1887年に南大門内の銅岷(クリゲ)に移した⁸。

政府においても、このような宣教師たちの学校、病院事業を支援した。政府の支援を受けていた広恵院の場合は言うまでもなく、培材学堂、梨花学堂などの名前がすべて王室によって作り与えられたものであった⁹という事実を見ても、当時朝鮮政府(王室)が宣教師たちの教育・医療事業にかけた期待がどのようなものであったのかを知ることができる。

1886年、高宗の要請により政府が設立した官立教育機関 育英公院(ユギョン コンウォン)の教師としてアメリカ人のギルモア(G. W. Gilmore)、バンカー(D. A. Bunker)、ハルバート(H. B. Hulbert)など[いずれも宣教師]が来韓し教育を担当した事実も、王室のキリスト教に対する好意的態度の反映だと言えよう¹⁰。すくなくとも1890年までのキリスト教の直接宣教に対する政府の公式的立場は「不可」であったが、100年前のカトリックの場合のように迫害と弾圧にまで至ることはなかった。それは朝鮮政府の意気地のなさにも理由があったが、より重要な理由は一般民衆のキリスト教に対する認識がかつてのように排他的で閉鎖的ではなかったという点にある。すなわち、民衆はキリスト教を新しく認識し始めていた。単純な無君無父の宗教、不忠不孝の宗教ではない、もっと別の宗教として認識し始めていた。初期の段階から、高宗をはじめとする王室との親接な関係を結んで展開されたキリスト教宣教は、無君および不忠の宗教だという誤解を取り除くには十分な姿を呈していた。しかも礼と孝といった実践倫理を極端に強調した儒教、その儒教を統治理念として立てられた朝鮮の政治・文化・経済体制の墮落と限界は、民衆に新しい体制と理念と宗教とを要求させる契機となった。朝鮮末期における政府の一貫性なき政策遂行、末端の地方官吏たちによる民衆への貪虐な収奪、儒教エリート階層の空論的な理念論争などに対し民衆は飽き飽きして嫌気がさしていた。民衆が望んでいたのは新しい秩序であり、その新しい秩序の理念的根拠となりうる新しい宗教であった。こうした民衆階層の人々が、初期プロテスタントキリスト教徒たちの中心的な人々であった。両班階層はまだキリスト教を忌避していた。培材、梨花学堂に入って来た初期の学生たちも、キーセン(妓生)のような賤民階層とか乞食や孤児たちであり、両班でも貧しい家の子供たちであった¹¹。

アンダーウッド[Underwood, Horace Grant: 米北長老会宣教師、最大の初代福音宣教師。一般に彼がアベンゼラーと来韓した1885年を韓国プロテスタント宣教元年とする。延世大学の前身徹新学校設立者、韓国名 元杜尤]は孤児院学堂を設け、孤児たちをかかえ養育した。民族運動家であった金 圭植(김 규식, キム ギュウシク) 安 昌浩(안 창호, アン チャンホ)などは、皆この孤児院学堂と関連のあった人物であった¹²。病院も民衆と接触しうるよい契機となった。国王が財政支援を与えて作るようになった「広恵院」を、一ヶ月のうちに「済衆院」と改名したのも、王室病院ではなく民衆の病院として発展させようとした宣教師の意図によるものであった。特にスクレントン[Scranton, William Benton: 米監理会宣教師、医師、韓国名 施蘭郭]は貞洞にあった施病院を南大門内の尚洞[상동, サンドン: 現、新世界百貨店の西隣に尚洞教会あり]に移した。

スクレントンは、病院を尚洞に移した理由を次のように説明している。

「病院を成功させるために最も必要なことは、大衆の要求に合うよう繁雑な場所に置

かなければならないということでもあります。尚洞にある南大門病院は、私の判断ではいろいろな点で有益な面を有しています。その位置とか、周辺の交通量、人々が密集して居住している環境などの諸要因がそれです。そこは民衆がいる場所であるのに反し、私たちが今住んでいる場所〔貞洞〕は外国人居住地域なのです¹³。」

南大門は市場地域であり、従っておもに商人と労働者階層の人々が住んでいた。人々の往来も頻繁であった。それに比べ、王宮と外国公使館が立ち並ぶ貞洞は高級地域であり、両班階層が住む上流地域であった。貞洞にある施病院に両班ではない民衆階層の人々も来院してはいたが、何と言っても地域環境が民衆にとって開放的であるというわけにはいかなかった。スクレントンは「民衆がいる場所 (Where people is)」に病院を移さなければならないと考え、その点を宣教会に強く訴えた。その訴えは受け入れられ、1894年に病院は貞洞から尚洞に移された¹⁴。

長老会が両班の町であるチェドン〔재동, 齋洞: 景福宮の東隣り, 現 地下鉄安国駅の北〕にあった済衆院を南大門のクリゲ(銅峴)に移したのも同じ理由によるものであった¹⁵。監理教は貞洞にあった女性病院 保救女館も東大門内に移した¹⁶。そこも常民〔상민, サンミン: 一般庶民〕階層の住宅地域であった。その結果、貞洞と齋洞に建てられていた病院などは2～3年の間にすべて南大門と東大門近辺の民衆階層居住地域に移されることとなった。

キリスト教はこのように学校と病院を通して民衆と出会うことが出来たのであり、この民衆の認識と支持を基盤として、宣教の拠り所を確保し宣教を始めたのであった。

II-(2) 嬰兒騒動と平壤キリスト教徒迫害事件：民衆による挑戦と試み

キリスト教が韓国に入ってきて、民衆の支持を受けることによって大きく成長したことは事実であるが、そのようになるまでにはいくつかの段階・過程を通過しなければならなかった。民衆による挑戦と試みの段階がそれである。こうした試みを経てこそ、キリスト教は西洋の宗教ならぬ「韓国のキリスト教」として定着することが出来た。

いくつかの試みがあったが最も代表的なものとして、1888年の「嬰兒騒動(ヨンアソドン)」と1894年の「平壤キリスト教徒迫害事件」を挙げる事が出来る。これらはいずれも一部のキリスト教に対して反対勢力が起こした、民衆による騒擾(そうじょう)事件という点に共通点を持っている。一つの事件はソウルで、もう一つの事件は平壤で起きた。

まず「嬰兒騒動」と呼ばれる事件を見てみよう。この事件は1888年6月10日から25日までの約15日間をかけ、ソウルと一部の地方で起きた宣教師排斥運動である¹⁷。事件はいまわしい流言蜚語が契機となって起こった。すなわち、外国人宣教師たちが韓国の子供たちを拉致し、ゆでて食べ、目玉をくり抜いて薬や写真機の材料に使うという噂であった。

そして子供たちは本国（アメリカ）に奴隷として売られたり、はなはだしきは男の子たちを男色の対象にすることもあるという噂まで広がった。宣教師たちが運営する学校や病院は、こうした子供たちの収容所や実験室に利用されているという噂であった。フランス公使館に勤務していた呉 奉擘（オ ボンヨプ）という者が、外国人たちが人肉と血を食しているのを見たと言いつらして回ることによって流言蜚語は急速に広まることとなった¹⁸。

その噂がたとえ誤解から生じたものであったとしても、民衆を扇動させるには十分であった。培材・梨花学堂に子供を送っていた父母たちが、子供たちの登校を止めさせ、宣教師の住宅には石が投げ込まれた。梨花学堂の場合には憤った群衆が学校に乱入したが、その過程で韓国人雇用者2名が殺される不祥事が起こった。外国公使館までもが、攻撃の対象となった。宣教師たちは通りに出ることも出来ないようになった。

保守派の人物として知られる外務衙門 [외무아문, ウェムアムン：正式名は統理外務衙門。内務衙門に対し外務衙門は外交全般を司る官庁。1882年高宗が外交の必要上から清国を模倣して設置] の趙 秉式 [조 병식, チョ ビョンシク：高宗時代各部署の大臣・長官を歴任] が、アメリカ公使に正式に「宣教師の伝道活動を監督すること」を要請してから2ヶ月後にこれらの事件が起きているのを見れば、「嬰兒騒動」事件の背後勢力が何であったのかが推測されうる¹⁹。

宣教師をはじめソウルに滞在していた外国人たちは、この騒動を外交問題化して解決しようとした。公使館は朝鮮政府に対し、暴動鎮圧と外国人保護とを外交チャンネルを通して要求した。六カ国の外国公使館の要請を受け入れ、韓国政府は檄文を張り出して巡察を強化させ、外国人保護に乗り出した²⁰。その上、仁川に駐留していたフランス、アメリカ、ロシア艦隊の軍人たちがソウルに入城し、武力示威を始めたことも事態鎮静化を果たす一つの契機となった。

このようにして嬰兒騒動事件は15日ぶりに鎮静化した。宣教師と宣教師が運営する学校、病院に対する攻撃的行為はなくなった。政府の「宣教師」保護勅令に逆らう勇気のなかった民衆も、その民衆の勢力を利用して政治的地位を確保しようとした保守勢力も、もはや手出しは出来なかった。具体的な事実根拠を求めえない流言蜚語的噂も、虚構であることが明らかとなった。ふたたび、宣教師たちの運営していた学校と病院を訪れる韓国人が増え始めた。

1888年の嬰兒騒動事件を経験したのち、スクレントンが本国に送付した報告文中の次の告白は意味深い。

「私たちはやっとのことで、民衆による試験期間を通り過ぎました。民衆は内心では私たちのことを信じ始めました。最初彼らは、私たちが丁重に助けや援助を求めても、鼻で笑うだけでした。民衆は動揺し騒乱を繰り広げながらも、もう一方では私たちが

彼らになしたこと〔医療や教育〕に対し、また初志一貫している私たちの意図に対し、同感同情心を示し感謝の意を伝えているようでした。私たちは勇気を持つようになり、韓国をキリストに導いているのだという確信を持つようになりました。これは何と素晴らしいことでしょう。このようにして、多くの人々に認められるようになり、さらには彼らによって別の多くの人々が影響を受けるようになることでしょう²¹。」

嬰兒騒動事件はスクレントンが表現している通り「民衆による試験期間 (the time of probation with the people)」であった。この試験期間を通過することによって、キリスト教は初めて民衆の宗教として発展する土台を整えた。

平壤のキリスト教も、民衆による一つの試みを経験しなければならなかった²²。平壤キリスト教迫害事件の発端は、1893年初めにさかのぼる。その時、平壤には監理宣教師ホール [Hall, William James: カナダ生まれの米監理教会宣教師、医師、韓国名 忽] が着任しており、補助師^[6] 金昌植 (김 창식, キムチャンシク)、通訳者盧炳善 (노 병선, ノビョンソン) などが活動していた。年ごとに陰曆正月には洞や里 [町や村] の住民たちが金を納め、村の井戸をさらって城隍祭 [성황제, ソンファンジェ: 村の守護神を祀る祭] を捧げるという風習があった。村の潑皮 [발피, パルピ: 一定の仕事もなくぶらぶらしている者、あるいは流浪者の類] の金ナクンという人物が、そのための金額を割り当て徴収する役目を負っていた。彼は宣教師の家を訪ねて行き、盧炳善にその金を出すように言った。ところが盧炳善は「イエスを信じる者として、そのような金を出すことが出来ない」と断った²³。

村の共同祭である井戸祭りに金を出せないというキリスト教徒の応答は、伝統的な民間信仰と民間共同祭に対する挑戦であった。これは単なる井戸の問題ではなかった。西洋のキリスト教による、朝鮮の伝統に対する挑戦として受け止められた。キリスト教に対する民衆の反感が芽生え始めていた。

こうしたさなか、1894年5月8日にホールの夫人が赤ん坊を連れて平壤に到着した²⁴。平壤の民衆は好奇心から列を作って宣教師の私宅を訪れたのだが、これを契機として保守勢力は反撃の謀議をめぐらした。

1894年5月10日夜、時を期して平壤キリスト教徒逮捕令が下された。外交的摩擦を避けるため宣教師には手を出さない代わりに、彼のもとにいる補助師、通訳者、教会員たちを捕まえよという命令が下った²⁵。教会員だけではなく、宣教師に家を買った者まで逮捕された。崔致良 (츄エチリャン)、宋麟瑞 (ソンリンソ)、禹ジリョン、申尚昊 (シンサンホ) などの信徒と、金昌植に家を買った金氏、また韓錫晋に家を買った洪ジェウンも逮捕された²⁶。彼らに対する最初の嫌疑は「異教を受け入れ、多数の良民を誘惑」した罪であった。背教するなら助ける、というふうにかつてのカトリック迫害と同じ姿を再演して

みせた。大多数は背教したり、役人に現金を渡して解放してもらったりした。最後まで残ったのは、金昌植と韓錫晋 [한 석진, ハンソクジン] であった²⁷。信仰問題では彼らを屈服させられないとなると、金を要求し始めた。この時、モフェット [Moffett, Samuel Austin: 米北長老会宣教師, 1893年平壤宣教師協会の設立するなど平壤宣教の中心人物, 韓国名 馬布三悦] はソウルに行っており、ホールが平壤にいた。閔丙奭 [민 병식, ミンビョンソク: 当時, 平安道の知事に当たる観察使であった] はホールの面談要請を黙殺しながら、部下を使いホールに金を要求した。獄中で、韓錫晋と金昌植は激しく殴打されなければならなかった。

ホールはこの問題を外交的に解決しようとした。電報でソウルにこの事実を明かにした。英国総領事ガードナーとアメリカ公使シルが、統理交渉通商事務衙門に対し激しく抗議した。抗議を受けた政府は、平壤に釈放を命じる電報を打った。しかし平壤の監司 [감사, カムサ: 知事・市長に当たる道の長官] は釈放しなかった。むしろ「国王による処刑命令が下った」という根も葉もない噂を広め、民衆を動員して、ホールの家を包囲したりして恐怖の雰囲気を作り出した。ホールの家の水の供給も中断させた。獄中に監禁させた二人の信徒には、より激しい殴打を加えた。ホールは重ねて電報を打った。英・米公使館はさらに厳しい抗議を示し、政府も平壤監司に対し信徒を釈放せよと前回以上に命令的な電報を打った。

結局5月11日午後6時、韓錫晋、金昌植は釈放された²⁸。これによりこの事件は、発生48時間ぶりに終結した。事件を起こした閔丙奭以下の官吏たちはほどなく左遷され、宣教師たちは公使館を通して賠償金500ドルを受け取った²⁹。

この事件も教会の勝利に終わった。ここにおいて、二つの意味を発見することができる。第一に、教会が新しい力の象徴として平壤の民衆に認められたという点である。地方においては最高絶対の権威の象徴であった観察使、監司の威力も、宣教師たちの「治外法権的」力を打ち負かすことは出来なかった。それは民衆よって、伝統的封建勢力の没落として認識された。それに代わって、キリスト教が新しい力の象徴として浮き彫りになった。

第二は、平壤の信徒たちの信仰的成長が成し遂げられたという点である。官家に逮捕され殴打されながらも、信仰を放棄しなかった韓錫晋、金昌植は教会の勝利の姿であった。初期、平壤の信徒たちのなかには、この事件を境に教会を離れて行く者たちもあったが、最後まで信仰を告白することによってキリスト教という信仰の真髄を証(あかし)したのである。この迫害を通して韓錫晋、金昌植は宣教師や教会員からだけでなく、一般民衆からも認められる人物となった。

キリスト教は、嬰兒騒動事件と平壤信徒迫害事件という民衆による試験を経た。この試みを通過することによって、キリスト教は民衆のうちに根を下ろしうる契機を得、かくして民族宗教として発展しうる土台が準備されたのである。

II-(3) 民衆の保護所となった教会

キリスト教が民衆の間に定着しつつある頃、民族の運命は外国勢力による侵略と内政不安によって危機的状況に直面していた。特に、腐敗した政府と両班官僚層の貧虐、これに対する民衆の抵抗意識の徐々なる高潮、19世紀末韓半島を取り囲む列強外国勢力による陰謀、などによって不安な状況が作られていた。こうした危機的状況を克服するための道は、果敢な内政改革と自主的解放によって外国勢力の侵略を克服することであったが、しかし当時の政府にその力量は欠けていた。

かかる状況下、東学農民革命と日清戦争が起こった。この二つの事件は密接な関連を有しているのみではなく、専制封建主義社会体制を没落させ、また日本帝国による朝鮮侵略を加速化させたという点で政治・社会的意味の大きい事件であった。

1894年5月、「東学乱」鎮圧を名分として朝鮮に軍隊を派遣して来た清国、これに呼応して天津条約をタテに一方的に軍隊を派遣して来た日本。この両者の間に戦争が生じたことによって韓半島、特に西海岸沿いの平壤・義州におよぶ西北地域の民衆は、生命と財産にかかわる甚大な犠牲をこうむるに至った。こうした状況において、教会は「民衆の保護所」の役割を果たすようになった。

「平壤キリスト教徒迫害事件」の当事者であった監理教の金昌植、長老教の韓錫晋の二人の指導者は、戦争の渦中において教会と信徒たちの財産および生命を守るために渾身の力を振るった。幸いにも、平壤を占領していた日本軍のなかに篤実なキリスト教信者がいて、金昌植を訪ね、教会の財産は安全に保護すると約束してくれた³⁰。監理教会はその当時西門の外にあり、そこに集まっていた教会員や財産は保護されることが出来た。しかしながら長老教会の方は大同門の中のノルタリゴル [地名^[7]] にあり、そこは最もにぎやかな通りに位置しているため、その財産を守るのは難しかった。しかも日本軍参謀本部がノルタリゴルに置かれていて、軍人たちの往来が頻繁であった。最初はある程度そこは安全であったが、掠奪を免れることはできなかった。戦争中、平壤に立ち寄ったモフェット宣教師の手紙には次のようにしるされている。

「平壤が包囲された時、この地域（ノルタリゴル）が最も大きい被害をこうむりました。教会は外国人の所有に属したので、最初はある程度の保護が受けられたのですが腹をすかした人々にかなうことは出来ず、私たちの教会の会員が掠奪を防ごうとしたにもかかわらず、数日の間に家の中はすっかり何もかもなくなってしまうました。まさに試練の時でした。自分の財産を安全に守ろうとして教会に持って来た品物が、自分たちが見ている前で掠奪されたのです³¹。」

教会員の大部分は避難していたが、残った教会員たちは教会に集まり共同生活をしてきた。そこが安全であったからである。教会は「外国の所有として」認識されており、清国の軍隊や日本軍が攻撃しなかったからである。だから教会員ではない人々も、生命と財産の保護を得るため教会にやって来た。教会はこうして、生命と財産を守ってもらおうとする人々で満ちあふれた。

たしかに教会は宣教師と宣教師の本国である西洋という外国の勢力（外勢）に基づいたものであるには違いなかったが、しかしそれにもかかわらず教会は戦争中「治外法権的」な特権と機能を発揮した。東学農民革命と日清戦争の渦中であって、民衆は本能的に生命と財産を守ろうとして必死であった。教会は「十字旗」を建物の入り口に掲げることによって、ここが「保護区域」であり「避難所」であることを宣言した。そしてそれは効果があった。東学軍であれ、清国と日本の軍隊であれ、「聖ジョージ (St. George)」の十字旗がはためく教会には攻撃をしなかった。ソレ [地名, 솔내/소래: 北朝鮮黄海道, 長淵郡, 松川里。ソレは漢字語, 松川も充てる。ソレ教会は朝鮮最初のプロテスタント教会] にいた宣教師マッケンジー [Mckenzie, William John: カナダ長老会宣教師, 韓国名 梅見施] は、1894年12月戦争のさなかにソレ教会の入り口に十字旗を立てた³²。教会員と共に長い竿を買って来て、穴を掘って立てた。その時、十字旗を掲げようとしている間に教会員たちは「イエスの名は権威なり」という賛美歌を歌った。旗は高くあがり、遠く離れている所からも見えた。

「200名ほどの東学軍が通り過ぎた。彼らのなかの何人かは“イエスの旗がなびくのを見て”外国人宣教師マッケンジーに会いに来た。それからしばらく経って東学軍の指導者と代表者たちが、マッケンジーを訪門した。彼も返礼として東学軍の村を訪ねて行き、丁重なもてなしを受けて帰ってきた。おびえていた民衆たちの目には、マッケンジーの勇気は驚くべきものであった。恐れずに東学軍の村を訪れた彼の行為は、どのような言葉によっても説明しがたいものであった³³」。

東学軍と親密に交わりを分かち合っている宣教師の図を思い描くことが出来る。東学軍を恐れていた民衆には、驚きの光景であった。ソウルの尚洞病院にも、これと似た旗がなびいていた。アペンゼラー [Appenzeller, Henry Gerhart: 米監理会宣教師, アンダーウッドと並び称される宣教師, 韓国名 亜偏薛羅] の報告である。

「私たちは、尚洞にある私たちの病院の建物の上に星条旗を掲げた。それによって朝鮮の人々は、私たちと同じく無限の安心感を感じ取っていたようである³⁴」。

星条旗がはためく尚洞病院は、監理教のスクレントンが運営していた病院であった。宣教部の建物の上に掲げられた星条旗は、ここは「治外法権の外交機関」なりと表示するものであり、それは戦争中の清国軍と日本軍の攻撃対象から除外される根拠でもあった。

教会員のみではなく一般の民衆たちも、星条旗やイエスの旗が掲げられている教会や病院を尋ね求めて来たのは当然のことであった。このようにして教会が民衆の「保護所」の役割を果たしたことは、この後の教会リバイバル（教会復興）の直接的な要因となった³⁵。

疎外されていた民衆階層が大挙してキリスト教に入って来たことにより、キリスト教は既存の（保守的）社会体制に対抗する改革勢力として位置付けられるようになった。嬰兒騒動事件であれ、平壤キリスト教徒迫害事件であれ、それらは保守勢力が自らの既得権喪失をおそれるといふ保守勢力の反動的陰謀から始まった事件であった。しかし社会体制はすでに近代市民社会形成過程に近づいており、それだけにキリスト教の位相と役割が重要な要因として目立つものとなっていた。既存の社会秩序と体制に対する民衆の改革への意志が、キリスト教を通して具体化され始めようとしていたのである。

〈(以下、【二】に続く)〉

原注

- 1, C.E.Sharp, "Motives for Seeking Christ", *The Korea Mission Field* (以下 *KMF*), Aug, 1906, pp.182-183.
- 2, 同上 p.182.
- 3, この論文においてしばしば言及する「民衆」という語の意味は、政治的意味の被支配 (oppressed) 階級という意味よりは、社会的経済的に疎外された (outcast) 階級という意味が大きい。
本論の検討対象である19世紀末から20世紀初頭の韓国社会において、今日の社会科学主義で言う階級構造的側面の被支配階層を抽出することは不可能である。さらにまた日帝支配の現実下、韓国民族全体を被支配階層として捉えることも出来る。従って本論において用いられる「民衆」の概念は多少あいまいではあるが、既得権層・所有階層に対する相対概念だと言いうる。
- 4, C.E. Sharp. 同上 pp.182-183.
- 5, 同上 pp.183.
- 6, R.S. Maclay. "Korea's Permit to Christianity", *Missionary Review of the World* (以下 *MRW*), Apr., 1896, p.289.
- 7, H.H. Underwood, *Modern Education in Korea*, International Press, New York, 1926, pp.17-21.
- 8, W.B. Scranton, "Historical Sketch of Korea Mission of the Methodist Episcopal Church", *The Korean Repository* (以下 *KR*), Jul., 1898, p.258; Annual Report of the Board of Foreign Mission of the Presbyterian Church in the U.S.A. (以下 *ARBF*), 1891. p.135; 李 萬烈, 「キリスト教宣教初

李 徳周 「初期韓国教会の民族教會的性格」【一】(1/3)

- 期の医療事業」、『東方学志』, 46/47/48合併号, 延世大学校 国学研究院, 1985, 6, 所収 pp.501-528. 参照.
- 9, H.G. Appezeller—*Diary*.
- 10, 李 光麟, 「育英公院の設置とその変遷」, 『韓国開化史研究』一潮閣, 1970, 所収, 参照.
- 11, M.F. Scranton, “Woman’s Work in Korea”, *KR*, Jan., 1896. pp.4-5; D.A. Bunker, “Paichai College”, *Official Minutes of Annual Meeting of the Korean Mission of the Methodist Episcopal Church* (以下 *OMAM*), 1896, pp.149-154.
- 12, L.H. Underwood, *Underwood of Korea*, Fleming H. Revell Company 1918, (李 萬烈訳 『アンダーウッド：韓国にきた最初の宣教師』基督教文社, 1990), pp.55-56; 주 요한 (チュ, ヨハン) 《안도산전집》, 1969, pp.23-26.
- 13, *Annual Report of the Missionary Society of the Methodist Episcopal Church* (以下 *ARMS*), 1893, p.255.
- 14, 病院は1895年に移転を完了した。ARMS, 1895, p.246.
- 15, 李 萬烈, 前掲「キリスト教宣教師初期の医療事業」, p.512.
- 16, *Annual Report of the Woman’s Foreign Missionary Society* (以下 *WFMS*), 1893-94, pp.66-67.
- 17, この事件については, 강 인규 (姜インギウ), 「嬰兒騒動事件」, 『韓国基督教史研究』(以下『韓基史研』), 14号所収, 1987. 6. pp.20-22. 参照
- 18, L.H. Underwood, 上掲書, pp.85-87.
- 19, 同上, p.86.
- 20, L.H. Underwood, *Fifteen Years Among The Top-Knots*, Fleming H. Revell Co., New York, 1904, pp.15-16.
- 21, *ARMS*, 1889. pp.293-294.
- 22, この事件については, 金 承台 「1894年 平壤キリスト教徒迫害事件」, 『韓基史研』15/16号, 1978, 8, pp.19-21. 参照
- 23, S. Hall, *With a Stethoscope in Asia Korea*. (金ドンニョル訳 『ドクター・ホールの朝鮮回想』東亜日報社, 1984), pp.109-111; 黄デヨンモ (황 덩모) 「わが日々の回想」, 『勝利の生活』ノーブル婦人篇, 朝鮮イエス教書会1927, 所収 pp.77-79.
- 24, S. Hall. 同上 p.109.
- 25, 黄 デヨンモ, 同上, p.79.
- 26, 李 徳周 『国の独立 教会の独立～韓国キリスト教の先駆者, 韓 錫晋牧師の生涯と思想～』キリスト教文社, 1985, pp.82-84.
- 27, 同上, p.84.
- 28, 『統署日記』3, 高宗31年 甲午4月 初7日; 金 承台, 前掲書 p.21; S.A. Moffett, “Early Days in Pyengyang”, *KMF*, Jan., 1936, p.55.
- 29, S.A. *Moffett’s Letter to Dr. Ellinwood*, Jul., 30, 1894.
- 30, S.A. *Moffett’s Letter to Dr. Ellinwood*, Nov, 1, 1894.
- 31, 同上, 手紙.
- 32, E.A. McCully, *A Corn of Wheat or The Life of Rev. W.J. McKenzie of Korea*, The Westminster Company, Toronto, 1903, pp.154-155.
- 33, 同上, p.155.

一方、マッケンジーと共にソレ教会を指導していた韓国人伝道師・徐景祚 [서 경조, ソギョンジョ: 韓国最初の長老教牧師7人の一人。徐相崙の弟]が、日清戦争が終わる頃その地域の東学指導者と〈道〉について論を交わしたという興味あるエピソードがある。長淵 [黄海道長淵郡] 一帯で猛威を振るっていた東学軍指導者、金ウォンサムが徐景祚を訪ねて来た。彼 [金] は東学の經典である『東經大典』という本を広げて見せ、「兒養淑氣」という一句の意味がわかるかと質問した。金ウォンサムが先ずその一句を「赤ん坊の汚れのない生気を、そのままに育てよ」という意味だと読み解いた。すると徐景祚は大きく笑って「どうしてそんなに無知なのかな？ 昔から赤ん坊の汚れなき生気をそのままに育てるのは誰でしょうか？」と詰問した。そうして「それはそのような意味ではなく、赤ん坊を育てる時のように そのような気持ちで人は自らの生気を保ち養え、という意味だ」と解き明かした。すると金ウォンサムは膝を折り曲げ「さすが大先生、天のことわりを捉えておられる大先生だ」と言い感嘆した。このことがあってのち、長淵の東学軍には‘ソレ教会や教会員たちには攻撃をせずに、保護を与えよ’との命令が下された。十字旗を掲げていたソレ教会を、東軍は避けて通った。(徐景祚「徐景祚の信道と伝道と松川教会設立史」、『神学指南』7巻4号, 1925, 8月, 所収, pp.96-97)。

34, E.A. McCully, 前掲書, p.137.

35, 参考として、米北長老会と米監理会の教勢・統計を調べてみると、次ようになる。

<表1> 米国北長老会 教勢統計

年度	末組織 教会	組織 教会	自給 教会	受洗 教会員	新入 教会員	教会員 総数	洗礼 志願者	出席 教会員
1884-85								
1885-86	1			9			9	
1886-87	1			25	20			
1887-88	1	1		65	45			
1888-89	1	1		104	39			
1889-90	3	1		100	3			
1890-91	5	1		119	21			
1891-92	5	1		127	17			
1892-93	5	1		141	14			
1893-94	7	1		236	76			
1894-95	13	1		286	50			
1895-96	26	1	15	530	210			
1896-97	73	1	40	932	347	6800	2344	4800
1897-98	205	1	170	2090	1153	7500	2800	5200
1898-99	261	2	230	2804	841	9634	3426	6509
1899-00	287	2	255	3690	1086	13569	4000	9114
1900-01	300	3	270	4793	1263	13694	4480	10865
1901-02	340	3	295	5481	970	16333	5986	13836
1902-03	372	3	302	6491	1435	22662	6197	15306
1903-04	385	7	353	7916	1876	23356	6285	16869

(資料: H.A. Rhodes, *History of the Korea Mission of the Presbyterian Church in the U.S.A.*, 1934)

<表2>米国監理会 教勢統計

年度	受洗 教会員	求道者	全教会員	新入者	受洗者	本国(米) の教職者	日曜 学校数	日曜学校の 教師と生徒	献金総額 (ウォン)
1888	11	27	38		34	2	3	43	
1889	9	36	45	7	27	2	3	43	
1891	15	58	73	28	9	1	2	76	
1893	68	173	241	168	80	4	5	133	
1894	76	145	221		51	2	4	170	77
1895	122	288	410	189	76	5	6	398	266
1896	223	588	811	401	145	8	7	536	756
1897	305	1074	1379	568	246	8	15	1017	
1898	556	1502	2058	679	461	10	27	1115	1596
1899	649	1967	2616	558	360	13	27	1265	1795
1900	792	3105	3897	1281	580	13	25	1109	1892
1901	948	3820	4768	871	580	15	40	1696	2910
1902	1296	4550	5855	1087	1055	15	47	2635	3229
1903	1616	5299	6915	1060	1066	19	61	3123	4309
1904	2006	4979	6985	70	853	18	70	2507	3036

(資料：Official Minutes of Annual Meeting of the Korea Mission of the Methodist Episcopal Church, 1904)

訳者注

[1], 「韓末」(あるいは「韓末期」, 「旧韓末」) という用語は、一般に朝鮮時代最末期から大韓帝国時代にかけての時期を示す用語として用いられているようである。従って本論でも取りあげられている「嬰兒騒動事件 1888年」「平壤キリスト教徒迫害事件 1894年」なども、「韓末」あるいは「韓末期」の事件として記述する場合もあるが、これは適切ではない。

「韓末」という用語を定義している辞典・歴史事典類は少ないが、ここに韓国の代表的国語辞典の二の定義を示したい。①李 熙昇『国語大辞典』1982, 民衆書林) ②金 敏洙, 高 永根, 壬 洪彬, 他編『金星版, 国語大辞典, 2巻』1991, 金星社)。

それぞれ「韓末」を定義して、①は「旧韓国の末期 (p.4110)」, ②は「大韓帝国の時期 (下巻, p.3658)」とある。なお①に言う「旧韓国」とは、「大韓帝国」と同義である。それは一般に韓国では現在の「大韓民国」を「新韓国」, 1897～1910年までの「大韓帝国」を「旧韓国」と捉えることによる。つまり「旧韓国」=「大韓帝国」であり、具体的には1897年から1910年の時期がそれである。従って、上の「嬰兒騒動 1888年」や「平壤キリスト教徒迫害事件 1894年」などを「韓末」の事件とするのは適切ではない。(なお本論の著者、李徳周教授はこうした不適切さを一切犯していない)。

ところで、①と②には若干の時間差が生じる。つまり、②が「大韓帝国の時期」: 1897～1910年までの足かけ14年間「全体」を指すのに対し、①のほうは「旧韓国の末期」: その14年間の「末期」部分のみ、例えば1905～1910年までの5～6年間のみを指すからである。この点に関しての詳細

は避けざるを得ないが、ここでは②のほうがより適切であることだけを述べておきたい。

- [2], 原文: 부흥운동 (ブフンウンドン), 復興運動。英語ではRevival (リバイバル) あるいは Revivalism, ドイツ語ではErweckung (信仰) 覚醒運動, 日本語ではリバイバルの訳語が多く, 信仰覚醒運動・大覚醒なども用いる。

世界キリスト教史から言えば, 欧米に起源を有す靈的な集团的あるいは個人的宗教現象を言う。教文館『キリスト教大事典』は「リバイバル」の見出しで次のように述べる。

「神のめぐみと力とが特に著しくあらわれ, 信徒を鼓舞激励し, 不信仰な人々が信仰に導き入れられ, 回心の経験を与えられ, また信仰から離れていた者も再び信仰に立ち帰らされるような状態に対して用いられる。それは聖霊による働きによるものとされている。日本では明治16年(1883)横浜で開いた初週祈祷会が数週間も続き, 3月にはリバイバルに化し東京, 京阪神に及び, 教会は活気を帯び入信者が激増した」(『改訂新版 キリスト教大辞典』教文館, 1968, p.1135)。

韓国では, 本論にも示されるごとく, このリバイバル運動が初期キリスト教においてきわめて大きい役割を果たすと共に, 今日においても「復興師(リバイバリスト)」つまりリバイバル専門の伝道者が存す。

韓国キリスト教史におけるリバイバル研究書としては〈徐正民「初期韓国教会 大復興運動の理論—民族運動との関連を中心に—」:『論文集 韓国キリスト教と民族運動』1982, 鍾路書籍pp.233-283, 所収〉, 〈朴明洙『韓国教会の復興運動研究』2003, 韓国キリスト教歴史研究所〉などがあり, 日本では〈倉塚平「韓国教会史断章—1907年のリバイバル運動をめぐって—」:『季刊, 三千里』第10号, 1977夏, pp.62-74, 所収〉などがある。

- [3], 日本では1873(明治6)年「キリシタン禁制高札の撤去」が政府の決定としてなされ, キリスト教宣教が一応「公式的」に許可されるに至り, これに前後して宣教師たちは「直接的」福音宣教を開始することが出来た。

しかし韓国の場合は日本と異なり, 政府による公式的なキリスト教宣教の公認は朝鮮時代~韓末期を通し遂になされることはなかった。歴史的偶然もあり国王(皇帝)高宗は個人的には初代宣教師たちと親密な交流を交わす一方, キリスト教それ自体に対しては無君無父の非儒教的思想であると信じ続けその公認は避け, 従って「公式的には」キリスト教の活動を医療宣教(病院)と教育宣教(私立学校)に限定し, 「直接的福音宣教」は許可していない(しかし, 「現実的には」遅くとも1890年前後には, 朝米・朝英修好条規などを根拠にキリスト教の「直接的宣教」を黙認せざるをえなかったが)。

日韓におけるプロテスタント初期宣教史を比較する場合, この点は両者の差異点の一つとして注目しておく必要があるであろう。そのため, 例えば本論にも登場する宣教師中, アレン, ス克蘭トン, ホールは医学部出身の医師であったり, 同様アンダーウッドも医療師として医療に深くかかわるなど, 韓国の代表的宣教師のイメージが, 日本の場合とは何か基本的に異なるのに気づく。またこうした点から, 〈李萬烈『韓国キリスト教医療史(大宇学術叢書)』2003, ACANET〉のような大著(1070頁)が, しかも韓国キリスト教史研究の第一人者の手によって著わされる所以があるのであろう。おそらく日本の場合には, こうした分野の大著が高名な研究者によって著わされるような歴史的背景が存在しないと思える。いずれにしろ, 日本とは異なりキリスト教宣教が公認されなかった故, 韓国の医療宣教と教育宣教は独自の発展を遂げていくのである。

- [4], 「学堂(학당, ハックタン)」という語は, 言葉としては日本と同様「学校」の一を意味した。しかし当初の学堂は, 民間家屋を使用するとか, その人数の規模においてなど施設面他からすれば「私

李 徳周「初期韓国教会の民族教會的性格」【一】(1/3)

塾」にあたる。ただし当時の韓国の学堂は、その教育理念は「リベラルアーツ（一般教養）を修め、奉仕精神に基づく人材の育成をめざす」とか、また授業科目は英語、漢文、天文地理、数学、生理、体育などを置く点では、従来の朝鮮教育史においてはみられない画期的なものであったと言われる。これについては（渡部学『朝鮮教育史（世界教育史大系5）』1975、講談社、pp.224以下）参照。

なお一般に「日語学堂」と称された日本人が作った「学堂」も、1900年前後の朝鮮半島のほぼ全域にわたって20カ所以上あった。これらの経営に団体として参画したのは主に、日本仏教界（東本願寺系、浄土教系）、中国教育で知られる東亜同文会、および日本キリスト教界（メソジスト教会、組合教会）の三であった。詳細は他に譲るが、これらの「日語学堂」が韓国の植民地化を目指す日本勢力に間接・直接に協力した点は否めない。これらの一つに、韓国人キリスト教研究者には悪評高き「京城学堂（1896-1905年、現ソウル）」がある。この「学堂」は日本メソジスト教会の主要者たちによって1894年設立された「大日本海外教育会」を母体としており、後には「日本組合教会による朝鮮伝道（1911、明治44年-1921、大正10年）」へと継承される布石の役割をになった。同学堂の第2代堂長を勤めた人物が、同様に韓国人キリスト教研究者には悪名高き渡瀬常吉（海老名弾正の弟子）であった。のちに渡瀬常吉牧師が主導した「朝鮮伝道」は、こともあろうに朝鮮総督府からの金銭援助によって運営されるものであり、その限り総督府の意向（朝鮮キリスト教の皇国臣民化）に強く制約されざるを得なかった。

本論のタイトル「初期韓国教会の民族教會的性格」に言う「民族的性格」とは、韓国を奪った「日本帝国主義に対するキリスト教民族主義」であるのみか、同時にそうした日本帝国主義と手を結び韓国キリスト教に対して神社参拝強要ほかの具体的な手先役を果たした「日本キリスト教に対するキリスト教民族主義」でもあった。

- [5]、貞洞, 苴洞, チョンドン：現、徳寿宮周辺の一ブロック（「～洞」は日本語「～町」に近い）。当時貞洞には本文に述べられるキリスト教医療施設以外にも、米・英・仏・露の大使館 公使館、アレン、モフェット、アンダーウッド、アベンゼラーなど代表的初期宣教師の自宅、培材学堂、梨花学堂、アンダーウッド学堂などが集中しており、貞洞はまさしく韓国初期キリスト教「揺籃」の町の一であった。なお本論の著者には、開化期の韓国キリスト教および教会の歴史を書き著わし残して置こうとする数点の著作が存す。いずれもが写真や地図が多くて、私たち外国人には特に楽しくて有益。その一に「貞洞」をテーマとした〈李 徳周『貞洞ものがたり—開化と宣教の揺籃—』2002、キリスト教書会）があり、本論の理解をたすけてくれる。

- [6]、原文：조사인, 조사인, 助事人。Helperの意。

初期韓国キリスト教（特に長老教など）では一時的に「助事」という職分を置き、この職分に就いた者を「助事人」と称した。彼らは将来の韓国人牧師候補者でもあり、宣教師のあらゆる仕事をたすけながら、宣教師による教育を受けた。初期韓国キリスト教における一時的かつ過渡期的職分であり、その後は神学生や伝道師や副牧師という職分、名称となる。

- [7]、原文：널다리골, ノルタリ・ゴル。{널다리, ノルタリ}は「木で作られた広い橋」の意。{골, ゴル}は元々「谷」の意であると共に、接尾辞として地名に付いて「村」の意を表す。日本の地名では「板橋」に類似。